

琉球大学学術リポジトリ

猪害対策協議会 (要旨)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21152

第5表 甘藷の栽培面積（出没可能）と被害面積

町 村	出没可能面積	被害面積
国 頭	6,445 a	644 a
大 宜	7,800	250
東 村	1,240	1,040
羽 地	100	70
久 志	1,269	480
名 護	1,500	1,180
恩 納	—	—
宜 野	150	100
金 武	10	1
計	18,514	3,765

甘藷の場合は、パイナップルやサトウキビに比べてイノシシの出没可能を面積も少なく、また被害面積も少ない。

3. イノシシによる農作物の被害状況

イノシシによる農作物の被害額は、年々増加しており、1964年度は全琉で34,403弗に達した。即ち、これは、1964年度を100とすると、1965年度は223、1966年度は404となる。

1966年の農作物別の被害状況を見ると第6表のようである。最も被害額の大きいのはサトウキビで、全被害額の73.1%を占め、次いでパイナップルの20.2%、その他の農作物（イネ、野菜等）の4.1%、甘藷の2.6%の順になっている。

市町村別には、国頭村が最も多く、金額にして76,673弗、次いで石垣市、大宜味村、羽地村、久志村、名護町、東村、竹富町の順になっている。

第6表 1966年度のイノシシによる農作物の被害状況

市町村	パイナップル		サトウキビ		甘 藷		そ の 他		合 計
	数量 (kg)	金額 (\$)	数量 (kg)	金額 (\$)	数量 (kg)	金額 (\$)	数量 (kg)	金額 (\$)	金 額 (\$)
国 頭 村	128,000	6,400.00	4,320,000	70,200.00	1,890	73.00	—	—	76,673.00
大宜味村	445,430	2,227.15	642,340	10,438.00	85,721	94.72	—	—	12,759.87
東 村	53,000	2,650.00	204,000	3,315.00	4,170	125.00	—	—	6,090.00
羽地村	27,100	1,355.00	575,000	9,360.00	18,000	1,170.00	750	112.50	11,997.50
久志村	16,600	830.00	420,500	6,833.15	13,155	394.65	3,067	551.50	8,609.30
名護町	9,670	484.00	30,000	488.00	31,500	1,575.00	20,160	4,838.00	7,385.00
宜野座村	800	40.00	2,000	32.50	100	4.00	—	—	76.50
金武村	750	25.00	3,200	324.00	48	6.00	200	6.00	361.00
石川市	—	—	7,000	113.75	—	—	—	—	113.75
石垣市	25,400	13,674.00	16,200	229.55	34,400	10.26	—	—	13,913.81
竹富町	9,220	404.57	24,200	377.52	5,000	150.00	2,200	220.39	1,152.48
合 計	715,970	28,089.72	6,244,440	101,711.45	193,984	3,602.63	26,377	5,728.39	139,132.21

波) 琉球政府林務課の資料より

(編 集 係)

猪害対策協議会(要旨)

参加者：国頭村役所、大宜味村役所、東村役所、羽地村役所、久志村役所、名護町役所、宜野座村役所、恩納村役所、金武村役所、琉球農業試験場、琉球林業試験場、北部営林署、農業改良普及員、北部製糖株式会社、琉球農連パイ工場、大東パイ株式会社、琉石産業研究所、琉球政府農林局、琉球大学農学部

はじめに

猪害の防除法には、捕獲などの積極的な方法と猪垣や忌避物の利用などによる消極的な方法があるが、従来から行われてきた方法の技術的な欠陥や政策上の問題について話し合い、更に、如何にすれば最も適切な最も合理的

的な防除対策が確立されるか、ということについても協議していきたいと思います。

食餌誘殺法について

国頭村の宜名真で、サツマイモにネコリンを入れて土壌中に埋め、それをイノシシに食べさせて成功した実例があるが、大変興味深い方法だと思われる。しかも一度食べてしまったイノシシは、その直後に死ななくとも、どこかで死ぬ可能性があるし、たとえ死なないにしてもその付近の圃場には近寄らないようである。ただ薬品を芋につめる場合にかかなりの注意が要求される。イノシシは非常に利口なので、薬品が外にもれて臭気を発したり、又湿気の多い場合にその部分から腐れるので初期の目的を達し得なくなる。

また、イノシシの大好物である落花生を山中で誘導用に栽培し、それに対して集中的にわなや銃を用いて駆除する方法も、食餌誘殺と捕獲を兼ねてはいるが割合に実用性があると思われる。

忌避物の利用

イノシシの絶対数を少なくするという積極的な防除面から考えると不満もあるが、しかし従来から広く行われており、一時的ではあるが手取り早い方法でありその効果も比較的高い。

いろいろな物が利用されているが、その一つにイノシシの血の利用がある。イノシシを解体する際に血液を別に取り、長期間（約一年）放置して腐敗醗酵させる。臭気が大変強く、効果が長いので空缶等に入れて畑の周囲に置くと猪害を防ぐことができる。これはと殺時の豚の血液でも代用できるものであり、実際に西表で行われている方法である。また、西表では次のような方法も行われている。クロツグの幹をとりまいている繊維（フガラ）で縄をない畑の周囲に二段に張りめぐらして、その一方に火をつける。ちょうど一晩で10 a 程度の畑の周囲を燃え尽くすし、所々に爆竹を仕掛けておけばイノシシが寄りつかなくなる。雨の少ない時期に利用されている。

人間の頭髪を土に埋めただけで効果を上げた例もあるし、またウニ、海藻などの海産物もよく利用されている。

人間の汗ばんだ衣服が、イノシシの出没しそうな個所にかかけられている風景は山地の農場へ行くとよく見られる。

イノシシの習性として、臭に対して大変敏感な反面非常に慣れやすいという性質があるといわれているが、一般に忌避物の利用の場合は一つの方法のみを継続して行なうと効果がなくなってくる。数種類の方法を適

当に組み合わせるのが賢明である。

忌避剤の使用について

沖縄ではまだ一般には使用されていないが、忌避剤としての化学薬剤にラムタリンがある。国頭村における試験ではその方法にやや適性を欠いたきらいがあつて満足な結果は得られなかったが、日本本土においては、他のクマやノウサギ、ネズミなどにも効果を上げている事から、継続した研究が今後も必要である。残効期間が6ヶ月もあり、雨などに対してもかなり強いものなので、沖縄でも十分活用できるのではないかと思われる。

猪垣について

戦前石積みした猪垣が比較的最近まで利用されていたが、農作物が山地に進出した現在では全く、用を足していない。猪垣作りは構築時に多大の労力を必要とするが、しかし一たん作ってしまった後の管理はたやすく年1、2回の補充で十分間に合う。数十年先を見越した長期計画の下に政府と町村と農民が一体となって行なうなら、原始的な方法ではあるが、その効果は半永久的で、かえって他の一時的な対策よりもいいのではないかと思われる。

金網を張りめぐらす方法は少々高くつくが確実性のあるものである。現在北部製糖を通して約4000巻（1巻、高さ1 mの33 m）が北部地区に入っているが、総合的な見地から行なっているのではなく、個々に、割と経済的にゆとりのある農家が自分の圃場の周囲を囲っているだけである。その点に対しても、金網に対する補助融資とかみ合わせての、政府による広い地域を一括した所の行政指導が望まれる。

現在行われているイノシシの買い取り補助は、イノシシをとる一部の人にのみ、その対象が限られているが、農家特に零細規模の農家全体の事を考えるならむしろ金網に対する補助の方が必要ではないかと思われる。

わなによる捕獲

イノシシの消極的な防除法は、イノシシの絶対数を少なくすることではなく、圃場を中心に考えて、いかにすれば農作物を猪害から守れるか、ということである。従って一時的な、間に合わせの方法であつて、特定の時期又は地域において被害が少なかったというだけで、その絶対数を減らさない限り、農家の猪害に対する不安をぬぐい去ることはできない。

沖縄北部のイノシシは毎年1000~1500頭捕獲されているにもかかわらずその数は一向に減らない。いろいろ

な条件から総合して判断すると常時約2000頭のイノシシが生息しているものと推定される。猪の行動範囲が5日～1週間で約80kmである事と併せて考えると、沖縄北部の農場はいつも猪出没の可能性を秘めている事になる。

猪の絶対数を減らす積極的な方法の1つとしてわれわれは、わなの利用を見逃すことはできない。普及員のA氏は羽地、名護、久志の山中にわなを仕かけ、一夏に60頭の猪を補護したようだが、人間に危険なおとし穴やおそいわなでない、危険性の少ないわななら、数多く仕かけておいても別に問題はないと思う。効果的なわなの仕かけ方についての早急な普及、指導が必要である。

猟犬、猟銃による補獲

猟犬を使っているイノシシの駆除も必要でないかと思われる。近年殺そ剤の使用が多くなってきた関係で優秀な猟犬が少なくなってきたが、大昔から行われている方法だけにその動きには極めて大きいものがある。鹿児島県や台湾においてはすぐれた猟犬がいるようだが、その導入も考えて見る必要はないだろうか。

又在来の犬でも小さい時からの訓練の仕方によっては立派な猟犬に仕立てる事は可能だが、この点についても考えて見る必要はないだろうか。

猟銃による捕獲も従来から行われているが、銃の管理に面倒な点が多く、その改善策が望まれる。しかしながらこの猟銃の問題は他の狩猟鳥獣や社会の問題と直接に関係しているのが難しい問題である。猟銃所有者の増加の問題にしても、沖縄におけるハンターの数は他県に比べて多く、保護鳥獣の数が減少しつつある現状から考えるとやはり問題があるようである。

山狩について

幸いに沖縄の島は細長いので大々的な山狩りは可能である。ちなみに沖縄北部で最も広い所が約14kmである。3m毎に1人づつ立ったとしても4,700人おれば十分である。4,5日をかけてイノシシを一ヶ所に追い込み集中的に駆除するならばイノシシの完全撲滅も決して不可能ではないと思われる。

伝染病の利用について

戦前病気にやられたらしいイノシシの死骸が山中に多数見られた、という話を老人から聞くが、豚には無害で野生のイノシシのみに作用する病気について研究して見てはどうだろうか。直接死にいたらしめないまでも、繁殖力を低下させるようなものか出来るなら、猪駆除に大きく貢献すると思うが…。

日本本土では害虫の防除にウイルスやバクテリア等の微生物を寄生させる生物農薬の利用の研究など相当行なわれているようだが、イノシシについても同様な方法は本格的な研究が行なわれるなら決して不可能ではないと思われる。しかしながら豚あるいは人間も同じほ乳類である事からこの事はむづかしい問題である。

最後に

現場にいると痛切に感ずるが、猪害の年々の増加は、農家の勤労意欲を減退させるばかりか、離農問題にも直接通ずるものと思われる。基幹産業としてパイン、甘蔗作を奨励するならば猪害対策の強化も行うべきである。会社直営の農場ならまだまだ立ち直れる余裕があるが、個人のしかも中小規模の農家にとっては、一夜にして1～2年の汗の結晶が台なしになる事実は致命的である。折角開墾した耕地が次第に荒蕪地に変りつつある現在、このことは急を要する問題である。これを機会に猪害対策協議会を設置して、常に前向きな姿勢で問題に対処すべきである。

(編集係)